

氏名	NILi
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲 第200号
学位授与年月日	2017年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	The Cross-dressing Girls in the 1970s Japanese <i>Shōjo</i> Manga (日本の少女マンガにおける「男装少女」 —1970年代をめぐって—)
論文審査委員	主査 特任教授 大西直樹 副査 特任教授 リチャード L. ウィルソン 副査 教授 田仲康博

論文内容の要旨

この博士論文は、学問的領域としてはそれほど俎上に乗ってこなかった「少女漫画」という領域に焦点を当て、その文化的社会的影響力を、単に歴史的回顧や事実集積にとどまることなく、ジェンダーと人種という二つの大きなカテゴリーにおいて学際的に分析したものである。少なくとも、この論文が「少女漫画」という課題が十分に学問的関心に耐える、極めて興味深い現象であることを示すことに成功しているという意味で、その意義が認められるものである。

まず、「少女漫画」の歴史的起源からの発展を戦前少女文化から説き起し、1970代に絶頂期を迎える「花の二十四年組」に求めるところからこの論文は始まるが、「少女」という言葉や概念がそもそもどこから発生し、そこにどのような関心が向けられたかを論じつつ、戦後の日本女性の声が発声を許されていたジャンルであることを指摘している。つまり、明治期以来、日本女性の求められる姿は良妻賢母であり、その予備軍としての「少女」のあり方に、少女本人ではなく、それを取り囲む男社会の視線が何を期待し、そのイメージに盛り込んで行ったかを、当時の人気雑誌の表紙絵の分析を行いながら、その概念の作られ方を明確にしている。

こうした分析を通して日本女性は、男性中心主義の家父長制度とヨーロッパ文化の優位性という大きな二重の抑圧の元にあり、それは、つまり、ジェンダーと人種に関わる二重に抑圧された立場であった。その例として、宝塚レビューを取り上げ、「清く、正しく、美しく」という原則が、実は良妻賢母の概念に直結した、西欧中心主義と男性原理中心の屈折した表現であることをその男役や女役のあり方から分析を行なっている。

これらに見られる男装した少女の文化現象をラカンの「鏡」理論や、ホミ・バーバの「擬態」論的視点を取り入れ、通常、分離しているかに見える男性原理と女性原理、あるいは日本主義と西洋主義が、二元対立的に対峙しているのではなく、鏡に投影された自己のイメージに対する願望である。つまり、少女漫画という領域では、男性、女性という二元対立の境界が曖昧となり、登場人物の髪型、服装、表情などに境界を乗り越えた現象として、両性具有、男装などが頻出し、それらが流動的、曖昧性、両義性となって表現されていることを具体的に分析している。要点は、その過程で二重に抑圧された女性の声の自由な発声が可能となっていた点を指摘している。また類似した現象がアメリカのポップカルチャーを代表するロックミュージシャンや画家にも顕著に現れている例を示している。

そして最後に、1970年代以降に起きた、メディアや題材や読者の大きな変貌の中で「少女漫画」が大きな壁に遭遇し、変貌を余儀なくされた。しかし、この博士論文は、少女漫画がしたたかにその中核的な原理を保持しつつ、さらなる変貌を経て広がり社会全般に深い影響を与え続けていると述べて結論としている。

論文審査結果の要旨

最終審査は2017年5月23日午前10時から午前11時まで本学教育研究棟257号室においておこなわれた。冒頭、執筆者による簡単なサマリーの発表が10分ほどなされ、その後審査員三名による問題指摘などが行われた。審査はすべて英語でなされた。

論文の趣旨の発表の後、審査にあたった田中康博教授は、この論文中、かなり頻繁に言及されるポストモダニズという言葉が、その内実や概念が明確に示されないまま、論議がなされていることの問題性を指摘した。また、もう一人の審査員であるリチャード・ウィルソン特任教授は、はじめに、本研究がその端緒から目覚ましい進歩を遂げ、研究方法や研究視点が大胆に発展してきた過程を、大いに賞賛できると評価した。その上で、もっとも重要な視座として「エイジェント」、つまり、少女漫画における主体はどこにあるのか、対象と主体の入り組んだ少女文化状況における明確化を求め、その点に今後の可能性と改善点があることを示した。主査の大西直樹特任教授は、論文全体が戦後史の大まかな流れの中で1970年代を頂点として書かれているが、ことにその時期に社会に重要な影響を与えたヴェトナム戦争との関連など、全体的に歴史的枠組みが脆弱であること、またアメリカ大衆文化についての言及は興味深い、少女漫画との関連についての議論が充分出ないことなどを批判した。とは言え、当初の研究目的とされていたところからの、進展は目覚ましく、これほどに斬新な視点を取り入れた執筆者の研究方法の変容を振り返り、その成長を高く評価し、労苦を称えた。

執筆者との論議後、審査が行われたが、審査員三名はこれまで学術的研究がそれほど盛んになされた対象とは言いにくいサブカルチャーとされてきた少女漫画というジャンルに、実は隠され抑えられてきた女性の真の声が充満している点を単に事実の集積ではなく、ジェンダーと人種という視点で切り込み、哲学的分析を加えた点で、野心的であり、十分に博士号を授与すべき学術的資質を備えている、という評価を下し、確信を持って合格の判定をするに至った。